

一八四九年アスタープレイス暴動

― 一九世紀中葉ニューヨークの社会関係と文化 ―

序

「暴動、暴動」一八四八年五月一日、前夜のアスタープレイス・オペラハウス（以下、アスタープレイス劇場）周辺で起きた事件を伝える見出しが、ニューヨークの各紙に一斉に踊った。劇場及びその周辺で、群衆と州兵、警察官が衝突し多くの死傷者を出したことは明らかだったが、事件直後の段階ではなぜこのような恐ろしい事態に至ったか理解できないでいた。数日後には改革派の立場からもっともらしい解釈を提示する『ニューヨーク・トリビューン』紙も、「現時点では事件に対する明確な判断を下すのは困難である。余りに生々しくショッキングであり、まったく予期し得ない出来事だった」と、ようやくその驚きを伝えるのみであった（図版1）。

結局、事件は二人の死傷者と一〇〇人以上の負傷者を数え、それまでのニューヨーク史で類例のない事件となった。しかし事の発端は、三年前イギリスで起きた二人の俳優（アメリカの人気俳優エドウィン・フォレストとイギリスの著名なシェイクスピア俳優ウィリアム・マクレディ）の喧嘩とされ、一見他愛なく見える原因とその重大な結果との余りにも大きな落差に、群衆の恐ろしさを見た同時代人も多い。しかし、アスタープレイス暴動として知られるこの事件には、単に「無知蒙昧」な群衆が

この箇所は著作権の
関係で削除した

森 脇 由美子

騒ぎを起こし暴動になったというだけではすまされない背景があった。そこには当時、急速な変貌のなかにあったニューヨークの社会が抱える緊張関係が横たわっていたのである。また、暴動自体も後世一般に伝えられているものとは必ずしも同じでない。まず、当時の新聞や事件の記録を通してその経過を追い、事件が残した手掛かりをもとに、事件の背景にある社会関係を探っていく。最後に、各陣営で事件がどのように解釈されたのかを検討し、当時のニューヨーク社会全体なかでアスター・プレイス暴動がもつ意味を理解してゆきたい。

(一) *New York Tribune, May 11.*

第一章 事件の経過

マクレディのアメリカ引退興業

一八四八年九月、イギリスの舞台上で活躍していたウィリアム・マクレディは、舞台人生の最後にアメリカ各地で引退興業を行なうべく大西洋を渡った。マクレディの舞台を心待ちにしている友人や信奉者たちが、彼の到着を歓迎してくれるはずであった。彼はこの時、大きな期待を持ってアメリカ行ききの船に乗船したに違いない。この興業が無事完了しすべてが終わったなら、ポストン周辺に心地よい家を見つけ、アメリカの友人たちの近くで悠悠自適の隠遁生活を送ることまで計画していたほどであった。

マクレディはアメリカで「民衆派」の観客からアメリカの演劇を見下していたとして反発を招くことになるが、このような非難は彼のアメリカに対する態度を必ずしも正確に伝えるものではない。三六年にも及ぶ

彼の舞台人生は、芸術性と理想を追求し、「正統」と呼ぶべき演劇を確立することに費やされた。彼の理想は、イギリスの演劇界ですら容易に達成しうるものではなかった。彼は台本研究や新しい演出の考案に熱心に取り組んだが、特定のパトロロンが支配するイギリスの舞台では、パトロロンたちの意向に左右されずにいかんして美意識や芸術性を基準に公演を行なうかという問題に、彼は常に頭を悩ませていた。興業の失敗もあり、マクレディがアメリカ行きを決意した頃には、彼のイギリスでの人氣はすでに陰りを見せていた。イギリス演劇界におけるパトロロン支配との長い戦いに疲れたマクレディは、こうした悪しき伝統から解放され自由なアメリカにはむしろ期待すら持っていたのである。アメリカにはまだ洗練された上質の演劇はないが、革命によって生み出されたリパブリカニズムは、イギリスで彼の前に立ちはだかった障害を乗り越える力を秘めた高邁な精神であるように思われた。

しかしこのような期待は、ポストンに上陸して間もなく脆くも打ち碎かれる。ポストンは彼の友人の多くが住む町であり、彼を好意的に迎えてくれるはずであった。だからこそ彼はここをアメリカ最初の公演地に選び、引退後の住まいをとも考えたのである。しかし二年前にイギリスで起こしたエドウィン・フォレストとの対立は、たしかにポストンにも影響を及ぼしていた。サムナーやエベリットらリベラル派知識人のサークルには暖かく迎えられたものの、民衆派の新聞『メール』紙は、マクレディとフォレストのこれまでのいきさつを記事にし、マクレディがアメリカの演劇やフォレストに不遜な態度を示したとして批判した。この時、ポストンの公演が妨害されたとする記録はないが、マクレディ自身が日記のなかで、「観客はフォレスト氏のような頭と足の大きい野獣に喝采を送ってきたものだから、私の最高の演技には何の関心も示さない」

と、観客の趣味の悪さをこき下ろしているところから見ると、マクレデイの舞台に賛辞が送られなかったのは確かである⁽³⁾。

一月末から始まったフィラデルフィアの公演では、マクレデイに対する反発がさらに明確な形で示された。フィラデルフィアにはマクレデイに先立ってフォレストが乗り込み、すでシエイクスピア劇の公演を行っていた。両者はライバル心をもやしなから、一二日間、『オセロ』や『ハムレット』など同じ日に同じ遠目を演じ続けた。マクレデイの舞台では、彼が演じはじめると平土間の観客が騒ぎを起こしたが、この時の騒ぎは彼がどうにか甘受できる範囲内で収まったようである。マクレデイは演技を最後まで続け、最終幕が下りたのち、騒ぎに加わらなかった観客に謝辞を述べた上で自らの心境を語った。彼は、かつてエジンバラでフォレストが公衆の面前で彼をなじるまで「この国のどの俳優に対しても敵愾心を持ったことはない」と、アメリカの観客の機嫌をとった。ただし、フォレストに対しては、「フォレスト氏のエジンバラでの行為は、イギリス人俳優の間では決してありえないこと」と非難を加えることも忘れていなかった⁽⁴⁾。

その後もマクレデイは西部や南部での巡業を続け、シンシナティでは多少の反発を受けたものの、その他ではまずまずの成功を収めたようである。しかしフィラデルフィアの出来事から、引退後にアメリカで暮らすという計画はすでに完全に断念していた。アメリカ最後の公演地ニューヨークに到着したとき、彼が考えていたことは、ニューヨークの公演を大過なく終え、イギリスに帰国することであった⁽⁵⁾。

五月七日の事件

アスタープレイス劇場で起きた騒動は、五月七日の事件と一〇日の事

件の二つの局面に分けて捉えることができる。七日の事件は、過去にもあった出来事の延長と見てよく、事件が驚くべき展開へと向かうのは一〇日のことである。実際、マクレデイのニューヨーク公演初日の七日に起きた七日の騒動は、これまでに他の都市で起きた出来事を単に規模を大きくして繰り返したにすぎないとも言える。また、昔ながらの「劇場の暴動」ともほとんど変わるところがない。アメリカの劇場では観客が舞台の俳優や出し物に不満があるとき、騒ぎを起こして公演を妨害することは、当然の行為と見なされてきた。平土間の観客は特にこの種の騒動に率先して加わり、どのような舞台が行なわれるべきか決定する権利を持つと解されていた。このような「劇場の暴動」は、ニューヨークでも度々繰り返されてきたが、騒動が劇場内で収まっている限り、これを力で押さえ込むようなことはほとんどなかった⁽⁶⁾。

さて、いよいよ五月七日、ニューヨークのアスタープレイス劇場でマクレデイの『マクベス』の公演が幕を開けることとなった。これまでの他の都市での出来事を考えれば、マクレデイのニューヨーク公演が何らかの騒ぎとなるのは十分に予測しうることであった。しかも、マクレデイがニューヨークに到着する以前から、『ニューヨーク・ヘラルド』紙などの大衆紙が今までのいきさつをあれこれと書き立て、人々の関心を煽っていた。イギリスでの喧嘩に始まり、フィラデルフィアやシンシナティなど、マクレデイとフォレストのこれまでの対立は、おもしろい読み物として知れ渡っていたのである⁽⁷⁾。

この日、アスタープレイス劇場には、普段の観客とは異なる種類の人々も大勢詰め掛けていた。客席には、明らかにフォレストびいきとわかる街の遊び人たちの姿があった。ニューヨークのストリート・ギャング、パワーボーイズのメンバーの一人、家具職人のリップレイは、後にこ

の事件の『覚え書き』を残すことになるが、彼も場ちがいな観客の一人としてこの場所にいた。公演当日の昼、リップレイは、仕事場に行く途中立ち寄った行きつけの床屋で仲間から、マクレディの公演のチケットを二枚、手渡されていた。彼は、誰か人を誘ってアスタープレイス劇場に行き、仲間たちが計画する騒動に加わるように言い含められていたのである。彼は七日の劇場の騒動について仕事仲間とともに、「可能なかぎりの大騒ぎをした」と『覚え書き』に記している⁹。

マクレディへの野次はすでに一幕から始まっており、その後も収まることはなかったが、騒ぎを十分に予測していたマクレディの自重した態度から、二幕目まではどうか演技を続けることができた。しかし、時間の経過とともに高まっていた興奮はすでに破裂寸前のところまできていた。三幕目に入る頃には、とうとう舞台上に木切れが投げ込まれ、オーケストラのところにも椅子が飛んでくるようになる、マクレディの忍耐も限界に達した。マクレディはお辞儀をして舞台の袖に引っ込み、公演を中止した。一方、事件の発端となった喧嘩のもう一人の当事者であるフォレストも、同夜市南部のパール・ストリートにあったブロードウェイ劇場で同じ『マクベス』を上演し、こちらは盛況のうちに幕を閉じたという¹⁰。

このような劇場内の観客と俳優のやりとりを見るかぎり、七日の事件はほぼ以前からあった「劇場の暴動」そのもののように見える。そこに何らかの違いを見いだすとすれば、それは騒ぎを起こした劇場が、二年前に華やかに落成したあのアスタープレイス劇場だということだけのことであつた。しかしこの差異こそ、実はその後の展開を決定的に左右する要因であつた。

五月一〇日の事件

事件の舞台となったアスタープレイス劇場は、一八四七年、ニューヨークのエリート層が望んでいた「オペラハウス」として開設された。一八四〇年代になると、エリート層の人々の間ではオペラ熱が高まり、それとともに「オペラハウス」の名を冠した劇場も建設されたが、それらは興業的に十分な成功を収めたとはいえず、またエリートたちの求める「上品な文化」の殿堂ともならなかった。彼らはアスタープレイス劇場こそ、彼らのための社交場となることを期待していたのである。実際、この劇場はその立地の面でも十分に彼らの意向に添っていた。豊かな人々が多く住む一五区の北の端に位置し、道を隔てて隣接するアスタープレイス・ホテルには、ニューヨークの著名な金持ちが居を置いていた。フィリップ・ホーンなどの富裕な人々の社交クラブでは、アスタープレイス劇場のシーズン・チケットを購入することは、入会の条件にすらなったほどである。一八三〇年代後半以降、ニューヨークの多くの劇場には、大勢の貧しい観客が押し寄せるようになり、豊かな人々にはむしろ堪え難い場所となっていた。エリートたちにすれば、アスタープレイス劇場だけは、そのような劇場と一線を画し、彼らの価値観を体現する文化施設でなければならなかったのである¹¹。

ニューヨークのエリートたちは、七日の事件に対して強硬な手段に出た。前年の選挙で当選したホイッグ党の市長ケイル・マッドフルに圧力をかけ、マクレディがもう一度ニューヨークの舞台に立てるように手配させた。マクレディ本人には次のような手紙を出し、ニューヨークで再び公演を行なってほしい旨を伝えた。

以下に署名した私たちは、月曜日（七日）の晩、アスタープレイス劇場

で起きた暴力行為のため、貴殿はアメリカでの最終公演を途中で中止せざるを得なくなったと聞き及んでいます。私たちはこのような公衆が認める方法で、貴殿の決断を覆していただくようお願いするとともに、後日貴殿が公演される際には、善良な市民たちが必ずお守りすることをお伝えするものであります。(以下、四七名の署名)^①

これと同じ文面の文書を市長と市内の新聞社にも送り、彼らはこれに一種の『陳情書』の性格を持たせた。結局、マクレディの公演は、最初の事件から三日後の一〇日に再演されることに決まった。リップレイの『覚え書き』によれば、それまでの二日間、街角には反マクレディを訴える扇情的なビラが貼られたという。「アメリカ人諸君。イギリスの手先が我々の土地に侵入するのを黙って見ているつもりなのか。オペラハウスに集まれ」^②。

一〇日のマクレディの二度目の公演は、警官二〇〇人のほか州兵三〇〇人にも守られて幕を開けた。劇場内には警官が潜り込み警備にあたったが、劇場の周囲を州兵隊が取り囲むようにしてマクレディを護衛した。劇場の外には群衆がみると膨れ上がっていった。七日の事件では騒動はほぼ劇場の内部だけに限定されていたのに対して、この日は州兵、群衆とも始めから劇場の外側に展開し、これが事件を大きく左右することになる。やがて劇場を取り囲んで警護していた州兵をめぐり、群衆から石ころや汚水が投げ込まれるようになり、辺りの興奮はさらに高まった。ついに州兵隊の司令官が「騒乱防止令」を読み上げ、群衆に立ち去るよう警告した。これはおとなしく解散しなければ発砲するという威嚇であったが、群衆は一向に立ち去る気配を見せず、その一部が劇場に乱入しようとした。その時、州兵隊に「撃て」の命令が飛んだ。彼らは群

衆に向かって一斉射撃をし、弾丸が群衆に降りかかった。銃弾はアスター広場やラファイエット広場周辺にいた群衆にも当たり、劇場周辺は流血の惨事となった。群衆の一部はバワリー街の方向に逃れ、そこから石で応戦を試みたが、さらなる一斉射撃を受け、彼らは散々になって夜の闇に消えていった^③。

劇場のなかもすでに混乱状態で、もはや演劇どころではなかった。マクレディは劇場から逃げ出し、場内では観客と警官とが入り乱れての大騒動を演じていた。結局、州兵隊が劇場の外で起きた混乱を力でねじ伏せた後、劇場内になだれ込み、暴動は完全に制圧された。あとにはただ、窓ガラスが割れ、見る影もなくなったアスタープレイス劇場が残された。このように、暴動の死傷者のほとんどは、劇場の外で起きた衝突で、州兵隊が発砲した銃弾によるものである。このような圧倒的な力の行使は、これまで例のないことであった。多くの市民は、余りの深刻な結果に強い衝撃を受けた。そこに牧歌的な昔ながらの「劇場の暴動」を見いだすことなど、とうてい不可能であった^④。

アスタープレイス暴動を語る場合、普通、ここで話を終える。しかし事件にはまだ続きがあった。警察や州兵の実力行使に対して直ちに抗議の声が上がる。翌日、午後六時、シテイ・ホール・パークで市当局に対する抗議集会が開かれた。集会には八〇〇〇人から一万五〇〇〇人が集まったといわれ、そこには一八三〇年代の労働運動で中心的役割を演じたジョン・コマフォードや、民主党非主流派で民衆派のボス政治家マイク・ウォルシュの顔もあった。集会では、市長マッドフルをはじめ、警察長官および警察、州兵隊に対する非難が決議された。ここに集まった人々は、この悲惨な事件の原因は警察と州兵の暴力にあると断じたのである。彼らはさらに「市民は一般のあらゆる娯楽の場で、その娯楽の承

認、不承認を決定する不可侵の権利を持つ」ことを決議し、ハワリーボーイズたちが計画した七日と一〇日の劇場での騒ぎを擁護した⁽⁶⁾。

シティ・ホール・パークでの抗議集会の後、参加者の一部はブロードウェイを北上し、騒ぎの現場であったアスタープレイス劇場へと向かった。劇場付近にはすでに群衆が集まっており、辺りは前日から州兵隊が非常警戒体制を引いていた。それは二つの大砲を劇場南側のラファイエット広場と北側の五番街添いに据えるといったほどのものしなであった。群衆はシティ・ホール・パークからやってきた人も加わってさらに大きくなり、警察および州兵との緊張が高まった。警官が群衆のなかで目立った動きをした人物を逮捕しようとした時、群衆から投石があった。州兵隊は前日と同じように、強硬姿勢をとり、群衆に発砲する構えを見せた。これで群衆は四散し、一連の事件は幕切れとなった⁽⁹⁾。

- (1) Buckley, "Go to the Opera House," 52-53.
- (2) Ibid., 53-54.
- (3) Moody, *Astor Place Opera Riot*, 72-74; William Charles Macready, *Diaries of William Macready II*, 403; Buckley, "Go to the Opera House," 54.
- (4) *Boston Mail*, October 30, 1848; Moody, *Astor Place Opera Riot*, 72-74.
- (5) Macready, *Diaries II*, 410.
- (6) これまでのニューヨークの劇場で起きた「劇場の暴動」については Buckley, "Go the Opera House," 164-168, 186-93.
- (7) *New York Herald*, May 3, 7, 1849.
- (8) John W. Ripley, *An Account of the Astor Place Riots of 1849* (New

York, 1878), 2.

- (9) *Herald*, May 8, 1849; *Tribune* May 8, 1849; Ripley, *An Account*, 2; Moody, *Astor Place Riot*, 107-110.
- (10) Buckley, "Go to the Opera House," 262-63.
- (11) *Herald*, May 9, 1849.
- (12) Ripley, *An Account*, 3.
- (13) *Herald*, May 11, 1849; *Tribune*, May 15, 1849; Moody, *Astor Place Riot*, 139; Buckley, "Go to the Opera House," 71-75; Ripley, *An Account*, 4-5. リップレイは一〇日の事件では州兵隊の隊員として事件の警備に当たり、ハワリーボーイズの仲間たちから怒りをかかったと記している。
- (14) Ripley, *An Account*, 6-7.
- (15) *Herald*, May 12.
- (16) Ripley, *An Account*, 7-8.

第二章 マクレディの支持者と暴動の逮捕者

アスタープレイス暴動の一連の事件は、一瞬激しく燃え上がったが、その結末は余りにあけなかった。エリート層が群衆の暴動に四八年革命を想起したこと自体、滑稽に思われるほどであった。しかし、そもそも俳優同士の喧嘩が発端であり、重大な政治問題や経済的対立が直接の引き金でなかったことを考えれば、短期間であれ、あれほどの大惨事になったという事実はむしろ特筆すべきことである。とりわけ、その参加者はこれまでの「劇場の暴動」と同じものと信じていた七日の事件から、多数の死者を出した一〇日の暴動へとエスカレートするには、単に「愚

表1 マクレディの支持者の職業

職業	人
法律家	22
商人	6
編集者	5
作家	3
競売人	2
医師	2
その他	6
不明	2
計	48

Buckley, "To the Opera House," 63 より計算作成

民の暴挙」というだけでは収まらない理由があると考えるのが妥当であろう。事件はたしかに劇場や演劇という文化の領域で生じたものだが、そこには単なる趣味や嗜好の範疇を越える、ニューヨークの社会全体に関わる問題が存在していたのである。さて、事件の記録からは、その背景を探るために利用できるリストが二つ残されている。一つは、七日の事件後に出された公演の再演を求めた手紙に署名した四七名の氏名のリストで、これはすでに述べたように、『陳情書』としての公的性格を持たせるため、新聞に公開された。いま一つのリストは、一〇日の暴動の逮捕者のリストで、事件直後に逮捕された一七人のうち、最終的に起訴された者五〇名の氏名である。この二つのリストはピーター・バックリーによって、年齢や職業、住所などが、可能なかぎり特定されている。それぞれのリストを検証しながら、両者の比較を試みる^①。

まず、四七名が署名したマクレディ支持の『陳情書』であるが、ワシントン・アーヴィグやハーマン・メルヴィルといった著名人の名前に思わず目が奪われる。しかし、この集団が全体としてどのような性格を持っていたかを把握するため、その職業の構成を調べた(表1)。このうち法律家が二二人と群を抜いて多く、商人六人、編集者四人、作家三人、

競売人二人と続く。圧倒的な人数の法律家には、サミュエル・ラグレスのような資産家も数人含まれているが、彼らは概して著名者のなかでは比較的財産の少ない部類に入る。巡回裁判所判事でハヴァード大学ロースクールでも教鞭をふるったウィリアム・ケントなど、ニューヨークでも指折りの影響力を持つ著名人も含まれ、これらの法律家集団がこの『陳情書』に正当性を与える役割を果たしたと考えられる^②。

商人は六人を数え、ここでは二番目に多い職業である。彼らは港湾都市ニューヨークで活躍する典型的な人物であり、社会階層も伝統的に上位にくる人々である。その他、競売人二人も全米一のビジネス・タウンならではの職業といえ、また表1では「その他」に分類したが、ジェイコブ・リトルのような近年発展が目覚ましいウォール街の株取引を生業とする者がいた。マクレディ支持者の第二集団は、このような商業・金融で富を得た者であった^③。

四七人のうち、編集者が五人、作家が二人と、文筆・出版業に関わる仕事を職業とする者が多いことも特徴的である。ただしメルヴィルはただ後世のような名声は獲得しておらず、新進の作家にすぎなかった。むしろここではすでに文筆家として十分に名を知られていたアーヴィングの方が、文化的権威を付与する役目を果たしていたものと思われる。この両人は当時の流行にしたがってか、オペラ見物に足繁くアスタープレイス劇場に通ったことで知られるが、同じくオペラ・ファンでアスタープレイス劇場の常連の一人だったウォルト・ホイットマンの名はここにはない。たまたま彼の名が洩れただけだったのか、それとも民衆への思い入れが強かった彼が裕福な人々の列に加わることを望まなかったためかは、想像するほかない。これらの人々のなかでは、ヤング・アメリカ派の編集者、エヴァート・A・ドゥイキンクがリーダー格だったに違い

ない。メルヴィルをはじめ、ほとんどが彼を中心としたヤング・アメリカ派に属していた。この文書自体、彼らの周辺で回されたとも推測できる⁽⁴⁾。

このように、マクレディの四七人の支持者の職業は、法律家、商人、文筆家など特定の職業にかなり偏っていたといえる。「陳情書」は九日の新聞に掲載されていることから、七日の事件後ほば一日で作成されたことになる。それゆえ何人かの中心人物が短期間に同調者を募ったとも想像され、それがこのような偏りとなった可能性もある。実際には、マクレディをひいきにした人々はもう少し幅広い層の支持者がいたと思われるが、しかしここに名前のある人々を見るだけでも、マクレディの側に立った人々の性格がある程度浮かび上がってくる。まず、マクレディ支持者に多かったのは法律家、商人、文筆家で、それぞれ法律、ビジネス、文化の領域で影響力を持つ人々であった。これらの職業は、社会階層としては資本家と中産階級の専門職集団に分類されるであろうが、現実には、法律家で土地開発業者のジョン・バレットのように、両者が重なっている場合も多い。また、職業の記載がないが富裕な家に生まれたジョン・フォスターであるとか、ニューヨークの名門家と婚姻関係を持つサイモン・ドレイパーやF・R・テイローのような者も含まれており、有名な大富豪の名こそ見当らないが、彼らはニューヨークの豊かな階層を形成する人々であった⁽⁵⁾。

さて、他方、逮捕者のリストからもその職業の構成を調べた(表2)。ただし、このリストからは事件当夜の逮捕者のうち、最終的に起訴された者しか知ることができない。事件の中心的人物でも、まんまと逃げのびた者やコネを使って起訴を逃れた者あり、ここから暴動に加わった者すべてをつかむことは難しい。しかし、暴徒たちに対する同時代の記

表2 アスタープレイス暴動の逮捕者の職業

職業	人
精肉職人	5
印刷工	3
製帆職人	3
樽職人	3
パン職人	2
機械工	2
その他の職人	9
その他	14
無職	2
不明	7
計	50

Buckley, "To the Opera House," 306-307より計算作成

矣

述の多くは、「浮浪者」とか「乱暴者」とか、およそ人物像の把握に耐えるものではなく、このリストを利用することは十分意義があるものと思われる⁽⁶⁾。

表2を見ると、精肉職人が五人ともっとも多く、次いで印刷工、製帆職人、樽職人が各三人、パン職人と機械工が各二人で、それ以外の職業はすべて各一人であった。一人ずつの職業のうち、オルガン職人や鉄砲鍛冶など、ある程度の熟練技術が必要な職人九人は「その他の職人」に分類した。なお、不明者七人については、その他の情報も欠落している。この七人という数字は無視し得るほど少ないとは言えず、その扱いは慎重にすべきであるが、情報のある逮捕者のうち無職は二人しかおらず、逮捕者の大多数が生業を持っていたことがわかる。そのうち、通常職人の範疇に分類される職業についている者が二七人と、全体の半数以上を占める。しかも、この中には、ニューヨーク最大の産業で、かつその地位が著しく低下した仕立て工は皆無であり、これに次いで地位が低下した靴工がただ一人含まれるのみである⁽⁷⁾。

職人以外の職業についていた者は一人で、このなかには職人より上の社会階層に分類される者もいれば下の者もいるが、総じて社会階層の高い者は見当らない。コルク商人、雑貨店店主、さらにその職種の内訳を見たと事務員・ジャーナリストも含まれているものの、ニューヨークに定着しているか定かでない行商人のほか、明らかに不熟練労働者に分類されるポーターや配管工、奉公人なども七人おり、職人以外の「その他」の項目には職人より下に分類される者が多い。以上のことから、逮捕者は職人層を中心とし、それより下の不熟練労働者も少し含んだ集団と特徴づけることができる。

ところで、暴徒たちの集団を語る上でいま一つの指標となりうるエスニシティに関しては、このリストに出生地の記載がないことから直接知ることはできない。ただしこれについては事件直後から暴動はアメリカ生まれのギャング、パワーボーイズが起こしたとする説と、街を徘徊するアイルランド移民の仕業とする説があった。逮捕者の名前にはアイルランド系を強く連想させるものも含まれるが、それが近年やってきたアイルランド南部のカトリック系であるかどうかは判断できない。しかし職業を見ると、ニューヨークのなかで相対的に移民の割合が低い職種が多い。苦汗労働化していた仕立て業や靴製造業には、当時、大量に流入していた移民労働者が多数を占めていたことを考慮すると、逮捕者にこれらの職種が極端に少ないことから、彼らの多くが移民ではなくアメリカ生まれであるとの推定も成り立つ⁸⁾。

これまでマクレディの支持者と暴動の逮捕者のそれぞれの職業を別々に検討してきたが、両者を比較するとその違いは一目瞭然である。マクレディの支持者は社会の上層に位置するもので占められていたのに対し、暴動の逮捕者は職人を中心とした労働者階級の人々であり、この二つの

表3 年齢構成

年齢	①	②
15-19	0	21
20-24	0	14
25-29	3	3
30-39	4	5
40-49	9	0
50-59	5	0
60-69	4	0
不明	23	7
計	48	50

①：マクレディの支持者
 ②：アスタープレイス暴動の逮捕者
 Buckley, "To the Opera House,"
 63, 306-307より計算作成

集団はほとんど重なる部分がない。異なっているのは職業だけではない。表3のように二つの集団を年齢別に分けて比較してみると、その違いは一目瞭然である。マクレディの支持者は四〇代前後の者が大半で、二四才以下の者が皆無であるのに対し、逮捕者には四〇代以上の者が一人もおらず、一〇代後半から二〇代前半の若者が三五人と圧倒的多数を占める。とりわけ逮捕者に若年層が多いのは特徴的で、この年齢層だけで七〇パーセント以上になる。ただ、すでに十分社会に定着していると思われるべき二〇代後半以上の者も八人ほど含まれており、暴徒は社会に根を持たない若者の集団であるとする見方には問題がある。

こうして現われた二つの社会集団は、そのままニューヨークで顕著になりつつあった二つの階級に相応する。一九世紀の第一・四半世紀、ニューヨークの経済は著しい発展を見たが、それははっきりと異なった二つの階級を生み出すことになった。メトロポリスへと飛躍するニューヨークが生み出す富は、そこに住む者全員に平等に降り注いだのではなく、豊かな階層に圧倒的に厚く注いだのである。そして彼ら豊かな階層の人々

は富裕な自分たちに相応しい、特別な文化を求めるようになった。その象徴がアスタープレイス劇場である。一八二〇年代半ば以降、彼らの間では従来のアメリカ文化では飽き足らなくなり、イギリスなどヨーロッパの文化を珍重するようになる。これに対して、労働者階級の人々は、彼らの贅沢なイギリス趣味は強欲の証であり、共和主義の精神に反しているとみていた。職人の多くが地位低下の危機にあるなか、上流階級のこれ見よがしのイギリス趣味は富裕な階級の人々に対する反感を一気に増幅させた。マクレディが代表していたのは、この鼻持ちならない上流階級そのものであった。一方、労働者階級の人々はその地位が低下する中で、共和主義的価値観を強くしていた。それは彼らが独自の解釈を加えることで階級意識を形づくる上で重要な核の役割を果たすようになり、上の階級に対する攻撃の際に利用された。また同時に、工業化の進行とともに仕事場から娯楽の要素が失われてゆくのと平行し、ニューヨークのような大都市にはバワリー街に代表される労働者階級向けの歓楽街が形成されていく。この労働者階級の世界は、乱暴さやから威張りが支配する、社会の上位にある者たちには許容しがたい性質のものだった。フォレストびいきの人々は、このような労働者階級の文化の世界を代表していた。両者は異なっているばかりか、互いに対立する関係にあったのである。

- (1) *Herald*, May 9, 1849; Buckley, "Go to the Opera House," 63, 306.
 (2) *Ibid.*, 206-08.
 (3) Philip Hone, *The Diary of Philip Hone*, ed. Alvin Nevins (New York, 1927), 755.
 (4) Edward L. Widner, *Young America: the Flowering of Democracy*

New York City (New York, 1999) が、ヤング・アメリカ派について本格的な分析を行っている。

- (5) Buckley, "Go to the Opera House," Edward Pessen, *Jacksonian America: Society, Personality and Politician* (New York, 1978).
 (6) Buckley, "Go to the Opera House," 305.
 (7) ニューヨークにおける工業化が職人に及ぼした影響については、Sean Wilentz, *Chants Democratic: New York City & the Rise of American Working Class* (New York, 1984), esp. ch. 3. 拙稿「メトロポリスの工業化と職人労働者—ニューヨーク市・一八三三—一八五〇—」『立命館文学』第五二六号（一九九二年一〇月）四二四—四五頁。
 (8) Buckley, "Go to the Opera House," 313-14.

第3章 事件に関する解釈

アスタープレイス暴動は人々を一様に驚愕させたが、その一方でこのような事態がなぜ生じたかについては解釈が分かれていた。事件の渦中およびその後に表示された見解を取り上げ吟味することで、前章に浮かび上がった当時の社会的、文化的状況をさらに掘り下げてゆきたい。

暴動の二日後の五月二二日付けの『ヘラルド』紙には、前日に、シテイ・ホール・パークで開かれた抗議集会を呼び掛ける次の二つのビラの文意が掲載されている。

アメリカ人よ！ 目をさませ！ 大きな危機がやってきた。アメリカの息子たちは、かつてその父祖が憎らしい悪漢どもを打ちのめしたというのに、イギリス貴族と外国の支配がこのアメリカのメトロポリスで勝利し、アメ

リカ人全員の問題にとってもっとも尊いものである言論の自由を奪われたままでよいのか。今それが決する。アメリカ人よ。集まれ！ 我々が鋼鉄の心を持った七六年の人々の息子たちであることを示そう！

シティ・ホール・パークへ行こう！ 人命の破壊に反対するニューヨーク市民たち。今夜六時、シティ・ホール・パークの集会に集まろう。昨晚、五月一〇日の嘆かわしい事件に対する公衆の意見を表明するために。

まず、最初のピラでは、革命の伝統を意識した表現がふんだんに使われている。「アメリカの息子たち」「七六年の人々」「イギリス貴族」「自由」など共和主義的用語をちりばめ、自らを革命の伝統継承者として位置付けてその正当性をアピールするとともに、マクレディと彼を支持したニューヨークの金持ち連中を共和国の敵として断罪した。これらの扇情的な表現は移民の急増とともに度々噴出するようになったネイティビズム運動では、移民排除を求める主張において使われるが、ここでは明らかに階級的敵対を表現する道具として使われている。「シンプルでピュア」を心情としたフォレストの演技を好む労働者階級の人々にとって、マクレディの手のこんだ演出や近ごろのエリート層のイギリス（ヨーロッパ）趣味は、まさに「外国支配」の兆候と呼ぶに相応しく、革命の伝統に反するものだった。

第二のピラは、事件翌日の抗議集会を呼び掛けたものである。市長マッドフルら、ホイッグ党に主導権を握られた市庁舎の目の前で、市当局の残酷な実力行使を非難する集会は計画された。この集会に集まった八〇〇人を上回る人々にとって、この「嘆かわしい事件」を引き起こしたのは、明らかに市当局の側であった。のちに一般に伝えられるような危

険な民衆が起こした事件としてではなく、公権力が行なった非道な「人命の破壊」として事件を捉える見方は、暴動の首謀者たちの間だけでなく、かなり多くの市民たちにも支持されていたのである。

ところで、抗議集会が開かれた場所は、別の意味でも象徴的であった。シティ・ホール・パークのすぐ脇にはあったパーク劇場は、永らくニューヨーク唯一の常設劇場として観客を集めてきたがすでに前年に消失していた。今はなきこのパーク劇場こそ一九世紀初頭までの劇場の文化を代表する場所であった。そこにはエリート層が観客のかなりの部分を占めていたが、アスタープレイス劇場のような専横ぶりを見せていなかった。パーク劇場でもときおり、「劇場の暴動」も起こったが、そこでは劇場の習慣として許容され、実力でこれを排除するなど想像もつかなかった。抗議集会に集まった人々にとって、新たに建設されたアスタープレイス劇場はアメリカにおける劇場のあるべき姿に反していた。集会に参加したウォルシュは、アスター劇場自体金持ちの虚飾の象徴であると批判した上で、この金持ちたちとつながったホイッグ党のマッドフルら市当局を激しく糾弾し、彼らとの対決を訴える扇情的な演説を行なった。

（アスタープレイス）オペラハウスが開館したとき、そこは白い山羊側の手袋をした人々のためのものだった。それこそ一五区の金満家連中の自惚れた心を示している。この連中のせいで、市長は軍隊に発砲させるようなまねをさせたのだ。（殺された者の）残された家族は、誰がいったい面倒を見てくれるのか。マクレディか、フォレストか、それともマッドフルか。否、誰も見てはくれない。我々は胸を張り、しっかりと大きな声を上げよう。さあ、神がお護になつているので、たとえ悪漢たちがさらに撃つてきても、我々は手に銃を持ち…（聞き取り不能）。私は自分で見た光景に胸がつぶれてし

まった。殺された人々は頭から汁を出し、身体をねじ曲げられ、引き裂かれ、恐ろしい怪我から流れ出した血で全身を染めていたあの光景に。私は市の検視陪審員に対し、市長とマツセル（ニューヨーク市警察長官）、そしてここで罪を犯したすべての者に殺人罪を立証するように求める。そして彼らを永久に世間から葬り去り、その罪で彼らの汚名が永久に残されることを願う。いま呪いを込めて彼らの名前を叫ぼう。ここでさらにもう一言。我々は我々自身のため、同胞市民のため、そして社会のために銃を手にし、また他の人にも銃を取るよう呼び掛けねばならない。（ここで騒ぎが大きくなり、興奮が一段と高まった。復讐を誓う叫び声が群衆から沸き起こった。）

以前、自らが率いるスパルタン同盟とともにロード・アイランド州のドアの反乱への加勢を試みたウォルシュらしく、ここでも血の気の多い勇ましい言葉が多用されている。しかしウォルシュの演説は、多くの労働者階級の人々にとっては、ただの誇張や空威張り以上の意味を持った。経済変化とともに地位低下を余儀なくされていた職人労働者は、ウォルシュ自身とその言葉に彼らの渴望する自立性の回復を見だし、欲深い資本家や企業家を攻撃する彼の毒舌に喝采した。彼こそこの時期の労働者階級にもっとも人気のある支持した政治家であり、その言葉はニューヨークのあらゆる場面で激しくなった階級差に対する彼らの憤りを代弁していたのである。

しかし暴動には、事件当夜からこれとはまったく逆の見方も強く表明された。暴動は必要以上に恐怖心を掻き立てた。前年、ヨーロッパで吹き荒れた四八年革命が、アメリカのエリートたちの間に群衆に対する恐怖を刻み付けていた。彼らははじめのうち、ヨーロッパの革命にむしろ共感さえ感じていたが、彼らの予想を遥かに超える急進化で頭になった

民衆の暴力に驚愕した。ニューヨークの富裕層の一人、フィリップ・ホーンは、アスタープレイス暴動のなかに急進化した革命の恐怖を見た。彼は日記のなかで暴動を社会秩序の危機と捉え、次のように記した。「一日の暴動は、実力によって鎮圧されて当然である。…市の秩序は維持されなければならない。」

このようにニューヨークで起きたこの事件は、ヨーロッパの革命とは規模や深刻さの点でまったく異なるものの、社会秩序の不安を掻き立てるには十分であった。エリート層の富の源泉でもあるこの半世紀ほどの繁栄は、同時にニューヨークという都市自体を大きく変貌させた。もはやウォーキング・シテイの規模をはるかに超えたこの都市は、ヨーロッパの大都会と同じように、富の極端な格差が誰の目にも明らかであった。豊かさを振りまく目抜き通りブロードウェイと労働者の街バワリー。この領極端な世界は、しかし、エリートにとっても決して望ましいものではなかった。エリートたちの多くはすでにブロードウェイ沿いにあった住居を一五区に移し、彼らの好みにあった空間を手に入れようとしていた。ブルーカー街付近はまさしくその典型で、オープン・スペースを意識的に設け、整った町並みが形づくられた。しかし、エリートたちの一五区は、まるでごみごみした労働者の世界に浮かぶ浮島のようなものであった。彼らから見ると、バワリー街をはじめ市南部の労働者階級の地区は、彼らが足を踏み入れられないほどの「悲惨」な場所であった。飲んだくれが街をふらつき、ギャング同士の喧嘩も絶えず、エリートたちが指し示すモラルなどおかまひなしてあった。

一八四八年のこの段階では、彼らはこのような労働者の地区に直接介入し、本格的な改造を試みるまでには至っていない。彼らはむしろ、アスタープレイス劇場を彼ら専用の劇場として守ろうとしたように、一五

区に集住し、周りの悪影響、上品で立派な街区を形成するかに専念していた。しかし、このような彼らの姿勢には明らかな限界があった。何よりも暴動がそのことを証明していた。ニューヨークが社会秩序の保たれた彼らが望むような街になるには、「乱暴」な労働者の文化を一掃し、通りのあるべき使い方や行動を労働者たちに教え込まなければならなかった。エリート層の積極的イニシアティブによる町の改造という考えは、やがてセントラルパーク計画へとつながることになる。

暴動直後の興奮がいくぶん落ち着きを見せた頃、事件関係者の動向や鎮圧の是非など、事件そのものへの関心とはいささか異なった視点から、事件を取り上げた記事が現われた。改革運動に肩入れしていた『ニューヨーク・トリビューン』紙は、一五日付けの記事で社会秩序の重要性を強調し、基本的には市当局の実力行使を認めながらも、このような事件を起こさないための予防策こそ求められていると強調した。事件の経過と背景をあれこれ論じた後、暴動の根本原因を次のように説明した。

……(アスタープレイス暴動には)、これ以外にも教訓となることがあった。それは十二分に考慮するに値すると思われ、そのいくつかをこれから述べていく。

木曜日に起こったような暴動には、事件が起きる引き金となった出来事以外にも原因がある。暴動はすでに我々の社会制度内部にある病から生じたものだった。事件以前から、野蠻、狂暴、無法、他人や社会の他の部分を持つ権利の軽視、無秩序や暴力の愛好といったことがすでに存在していた。それらは社会に広がった病的な影響力によって形成され、さらに強化されていた。暴動のなかでそれらは特定の目的の達成に結び付けられ、そのような目的のために実行されたのである。…暴動を引き起こした動機や

目的を非難する一方で、その背後にあるすべての要因については黙ったままでよいのだろうか。もしそうなら、我々はジャーナリズムの責務を認識していないことになる。

ほとんどの大都市では、潜在的に暴徒となりやすい連中に出くわす。そのなかで命知らずで向こう気が強い者が暴徒となり得るのだ。そんな人間は田舎にもいることはいるが、ずっとそこにとどまって住んでいるのではなく、まず余所者である。彼らのごく当然の成り行きにしたがって、獲物を求める高のよう到大都会へ集まってくる。…彼らはそこで一人であるのではなく、一つのクラスを形づくり、それゆえ彼らの目には、自分たちがある種のリスクタビリティを持っているのだと思いついでいる。…我々はまず次の点を知らなければならない。ある種の必然によって都市に集まってくる、いま述べたような連中が、都市において大きな勢力を持つに至っており、不道徳で不幸な結果をもたらすようなきっかけさえあれば、彼らは悪事を働くのだ。

この記事を書いた人物は明らかに事件の最大の原因を、事件の直接の首謀者ではなく、昨今の大都市の社会状況にこそあると考えていた。ここには都市に集まってくる危険な分子への懸念が明確に表現されている。さらに、「劇場の暴動」を計画したのが移民ではなくアメリカ生まれが圧倒的に多かったのを知りながら、「都市では移民の数が急増し、その存在が直接的にも間接的にも、都市の社会秩序を脅かしている」ことに言及し、大都市の潜在的な社会混乱原因を、大量に押し寄せてくる「一文無し」の移民の群れであると結論付けた。記事には、こうした「憂慮すべき事態」への処方箋も示されている。それは、都市に蓄積される一方の貧しい人々を西部に移住させ、いち早く財産を持つ責任ある市民へ

と変えることであった。西部の土地はこのような都市問題の解決のためにも、だれもが容易に入手できるものでなければならぬ。『トリビューン』紙の編集長、ホールズ・グリーリのような改革派の人々の目には、ニューヨークのような大都会で社会混乱を回避するには、土地改革という根本的な解決策が必要だと映ったのである⁽⁹⁾。

ところで、『トリビューン』紙は翌年、産業会議の労働運動が高揚すると、「労働改革」として他紙に類を見ないほど紙面を割き、その動向を伝えている。グリーリ自身も産業会議の活動に関与し、労働者寄りの立場をとることになる。ただし、労働改革を提唱する人々は、「産業の平和」を目指したグリーリに典型的に見られるように、仕事場で生じた対立をあくまでも階級間の争いではなく、改革運動の一環と見做しており、ストライキなどのラディカルな運動には否定的であった。しかし、アスタープレイス暴動で爆発した労働者階級の「乱暴」で「荒々しい」文化は、伝統文化にしがみついた古いタイプの労働者のみに見られる特性ではなかった。それが労働運動においても本来的に存在する要素であり、一見「理性的」に進んでいるかに見えた産業会議の運動でもいつ噴出するかわからないものだったことは、翌年夏の仕立て工のストライキの衝突ですぐに明らかになった。実際、改革派の人々は、一八五〇年の労働運動が進展するなかで、次第に関心を労働改革から土地改革に戻し、労働者の自律的な活動とは袂を分かっていく。結局のところ、グリーリのような人物にとって、社会を混乱させる可能性をもつ労働者階級の文化は「矯正」の対象でしかなかった。それゆえ、一八五〇年代に入り、良い労働者と悪い労働者の選別を推進する企業家や、町の改良による秩序化に着手しようとする社会改良家とむしろ手を携え、労働改革の熱は一気に冷えていくことになる。アスタープレイス暴動に対する彼らの解

釈と態度は、このようなその後の彼らの選択を明示していた。

- (1) *Herald*, May 9, 1849.
- (2) Wilentz, *Chants Democratic*, 316-24.
- (3) David Grimsted, *Melodrama Unveiled: American Theater & Culture, 1800-1850* (1968, rpt., Burkle, 1987), ch. 3; Bruce McConachie, *Melodrama Formation: American Theater and Society* (Iowa City, 1992), ch. 2, 3; Buckley, "Go to the Opera House," 85-100, 102-05. 拙稿「劇場の街」ニューヨークの誕生—アンテベラム期の社会と文化—『立命館文学』第五五八号（一九九九年二月）、七三四—七五五頁。

- (4) *Herald*, May 12, 1849; Buckley, "Go to the Opera House," 14-15.
- (5) Wilentz, *Chants Democratic*, 326-35.
- (6) Hone, *The Diary*, 866.
- (7) Edward Spann, *The New York Metropolis: New York City, 1840-1857* (New York, 1981), ch. 2, 3.
- (8) *Tribune*, May 15, 1849.
- (9) *Ibid.*, May 15, 1849.
- (10) Wilentz, *Chants Democratic*, 335-43, 377-83.

おわりに

一八四九年のアスタープレイス暴動は、二つの階級がそれぞれまったく異なる文化を持ち実力で対峙した事件であった。この段階ではまだ、その雌雄は決しているとは言えなかった。暴動自体は鎮圧され、マクレ

デイ支持者たちが勝利したかに見えるが、ほとんどの町の通りはまだ労働者のコントロールにあった。エリート側に立てば、事件は彼らの街に対するアプローチの失敗とも取れる。南北戦争を挟んでしばらくの間、メトロポリス・ニューヨークは両者の社会秩序をめぐる争いがもっとも重要な問題であり続けたのである。